# 僕等が紡ぐ恋の詩～月と太陽のレクイエム～

林田くう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕等が紡ぐ恋の詩～月と太陽のレクイエム～

【Ｎコード】
Ｎ２７９９Ｙ

【作者名】
林田くう

【あらすじ】
主人公、一（はじめ）は日陰の世界の住人・・・世間で言う不登校児であった。
ひょんなことから異世界・・・《太陽の世界》にやってきた一は王国の姫、ユナからあるお願いを受けるのだった。「世界中にいる《勇者》を倒して欲しいのです」
残酷な《勇者》の存在。そして、２つの世界の隠された秘密・・・
人々の想い、願い、そして別れ・・・。ひ弱だった少年が最後に手にするものとは・・・

不登校児であった少年の成長と冒険、そして恋を描く本格的ファンタジー開幕！

「捧げるよ。この命全部、あんたのために・・・」―本文より

# 登場人物

主人公　不登校児だった少年
名前：一（はじめ）　年齢：１５歳

〜太陽の世界〜

ヒロイン　一国の姫君
名前：ユナ　年齢：１５歳

仲間　ユナの従者
名前：ルカウティウス　年齢：２７歳

仲間　ルカウティウスの妹
名前：シェル　年齢：１２歳

仲間　超のつくほどの美男
名前：クラウド　年齢：２０歳

謎の美少女　クラウドが仕えている
名前：ティア　年齢：１８歳

〜月の世界〜

魔王　〜月の世界〜の支配者
名前：デザイヤ　年齢：５８９歳

魔族　魔王の従者
名前：ドゥーデント　年齢：３８７歳

## 登場人物（後書き）

また、増えるかもです。

# 序章

閉ざされた世界の中で終わりを迎えるのだと思っていた。

外に出るのが怖くて、誰かにけなされるのが怖くて・・・。

それが怖くて、僕は逃げた。

友達から、学校から、世の中から。

夜な夜な母さんが泣いているのも知ってるし、父さんが僕を嫌っているのも知ってる。

大丈夫、僕がいなくたって世界は何も変わらない。

それに弟の大樹がいるじゃないか。

僕は、日陰の住人・・・

世間は、僕のことをこう呼ぶ。

「不登校児」

これは、そんな少年に起きた奇跡の出会いの物語である・・・

# 少年は夢で出会う

「ねぇ、一学校行かないの？」

「行かないよ」

「そ、そうよね。ごめんなさい・・・」

「おい、一いつまでそうするつもりなんだ。」

返事が返ってこない。父はふぅ・・・とため息をついて母の肩に手を置いて我が息子の部屋から遠ざかってく。

それが分かると、一はのろのろとベットから出て閉め切ったカーテンからちょっとだけ外を覗いてみた。

一は今年で１５歳になって、立派な大人への道を歩みだす年齢。

それはあくまでも・・・一般の場合だが。

最後に外に出たのはいつだっただろうか。たしか・・・中学の入学式の日。

中学なら、知らない人だっているし平気だと言われて行ってみたのだ。

結果は・・・凄まじいものだった。

小学の時に一緒だった一部の生徒がクラス中に一のことを広め、よ

ってたかってからかってきたのだ。

当然、一は怯えに怯え、それが最後の外の世界になり・・・

「・・・」

一は、そっとカーテンを閉め、服を着替えてみるが別に切る必要などない。

外に出たい・・・出たくない・・・

矛盾する己の気持ちに一は髪をかきむしり、ベットに倒れ毛布をかぶる。

「はぁ・・・」

ため息をついて、眠りに着く。

（もう、目なんて覚めなければいいのに・・・）

「助けて・・・」

真っ白な世界。どこまでも、永遠にあるような空間に一は立ってい

た。

「誰？・・・誰なんだ？！」

どこからか聞こえる謎の声に一は翻弄される。

少女の声のようだった。それも、凛として優しく溶けるような声・・・

「わたくしは、ユナ・・・」

「ユナ・・・？」

「助けて下さい。一様・・・」

「ちょっと、待てよ！！僕は・・・！！」

外に出られない・・・と、言うところで止まった。

これは・・・夢だ。夢なら怖くないかもしれない。現に今、少女と普通に話せている。

ならば、せめて夢の中で外に出るのもいいだろう。

「分かった。助ける」

「ありがとう・・・」

ほんの少し、声のトーンが上がった気がした。

そして、ぼやけていく視界・・・

「！！！」

突然目が覚めて、身体を起こす。

あたりは一面草木花・・・人工的に作られたであろう物が１つも見あたらない。

風が心地よく通り過ぎ、草同士がざわざわと風を喜んで迎えている声に、青い空に流れる白い雲

「本物みたいだ・・・」

こんなにも空気がおいしいとは知らず、こんなにも草の擦れあう音と海の満ち引きの音が似ていることも知らなかった一は胸を躍らせて、思うが侭に両手を広げた。

「あいつか。」

「！？」

驚いて振り向くと、そこには赤い髪の青年が立っていた。

「だ、誰なんですか・・・！！」

「ユナ様がお待ちだ。着いて来い」

青年は、自分の言うことだけを言い背中を向けて歩き出す。

着いて行くか・・・行くまいか。

考えるのに、少々の時間を使い・・・着いていくことにした。

ユナという少女との約束があるじゃないか。

それが、決め手だった。

## 少年は夢で出会う（後書き）

新しく始めた連載作品です。
応援よろしくお願いします＾＾

# 月と太陽の狭間

「あの・・・」

一の前をツカツカと歩く青年に勇気をだして声をかけているのだが、青年は一向にこちらを見ようともしない。

だんだん腹が立ってきて、ついにはひときわ大きな声で呼んでみた。

「あの！！」

すると、やっとのことで青年は反応を示す。

「何だ」

「あの・・・、ユナ様って誰なんですか？」

「ユナ様を知らない？〝月と太陽の狭間〟にて会ったのではないのか？」

「〝月と太陽の狭間〟・・・？あの、白い世界のことですか？」

一の心臓が速くなってきた。なぜなら、違和感を感じ始めたからだ。

この風といい地面を踏む感触といい、夢にしてはできすぎている。

まさか・・・本当に違う世界に来てしまったのだろうか。

「本当に知らないようだな。ならばいい。あとでユナ様の口から聞

くことだろう」

青年は、ぶっきらぼうにそう言うと突然歩みを止める。

「あの町が、ユナ様の父上・・・ドゥルーガ王が治める王国の中心の町、サイケデリカだ」

城壁で囲まれた町は、高くそびえ立つ城を中心として成り立っていて、まるでヨーロッパやイギリスまたは、ゲームに出てきそうな町であった。

「すごい・・・」

違和感を忘れ、呆然としている一をよそに、青年はまた歩き始める。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!!」

一は青年の背中を追いかけながら、サイケデリカへと足を踏み入れた。

町はわいわいと市場に負けない活気で溢れていた。

遊びまわる子供たちに、ベンチに座って会話を楽しむご老人、買い

物をする奥方、着飾った娘達・・・

ありとあらゆるものが、一の好奇心をくすぶってやまない。

「ルカウティウス隊長!!」

城に入る門のところで、青年は門兵に呼び止められる。

青年は、名をルカウティウスというらしい。

「なんだ、騒々しい」

「申し訳ございません!!いや、実はですね・・・」

ここから先は、一に聞かせたくなかったのか、門兵が小声でしゃべったので一には何も聞こえなかった。

「分かった、ただちに準備をさせておけ」

「ですが・・・」

「ユナ様にも、考えがあるのだ」

「・・・了解しました」

門兵はそう言って、ルカウティウスに敬礼をする。

そんなことはお構い無しに城に入るルカウティウスに、一は申し訳ない気持ちになってしまう。

（僕は、あんな態度できっこない・・・）

急に、ルカウティウスが偉い人に見えて、なぜか一の気持ちはしぼんだ。

「お待ちしておりました」

玉座の間に連れてこられた一は、困惑しつつも頭を下げた。ルカウティウスで見えなかったかもしれないが。

「ユナ様、例の者を連れてまいりました」

「ありがとう、ルカウティウス。」

ルカウティウスは「もったいなきお言葉」と言い後ろへ下がり、ユナという少女の姿がはっきりと見えるようになった。

ユナは健康的な白い肌にくるんと巻き上がるまつ毛。将来は美女と称えられそうな容姿をもっている愛らしい少女であった。

## 月と太陽の狭間（後書き）

ユナちゃんの年齢は近いうちに書くと思いますが、一応書いておきます

「１５歳」です！！

一君と同じです～。

# 太陽の世界

「えと、初めまして。一です」

「一様・・・ようこそ。我が王国、いえ、太陽の世界へ」

一様と呼ばれ、一は「そんなこと・・・」と、小さく言ったが、やはり恥ずかしかったようで、手を後頭部に回してにこやかになった。

「そこで早速、お願いの内容を話したいのですが・・・その前にこの世界について話さなければなりませんね」

ユナは、ほんの少し疲れたような表情になり話を始めた。

「わたくしたちの住む世界・・・ここを〝太陽の世界〟といい、もうひとつの・・・魔王が支配する世界を〝月の世界〟といいます。その名の通り、〝太陽の世界〟には月が〝月の世界〟には太陽がありません」

「え!?」

「無理もありませんね・・・。あなたは〝月と太陽の狭間〟の世界から来たんですもの・・・」

「いや、だって月と太陽ってゆうのは同じ宇宙にあって・・・」

「普通に見ればそうですが・・・太陽・月の近くに歪みがあるのです。」

「つまり・・・己の世界はわれ等の世界と魔王の世界にはさまれているのだ」

少し離れたところでルカウティウスがそう説明した。

「だから、月と太陽のどちらも世界に存在するんです」

「はぁ・・・」

「まぁ、そんなに固くならないでください。それで、お願いというのは・・・世界に散らばった〔勇者〕を倒して欲しいのです」

「えぇ!?」

月と太陽の次は勇者ときた。そもそも、勇者というのは・・・ヒーローであって、正義の味方をさすのだが・・・。

「わたくしたちは〔月の世界〕の魔王と平和条約を結ぶことになったのですが・・・民は、それを断固として拒否したのです。おかげで魔王の部下達も不信感を募らし、ついには自ら〔勇者〕と名乗り、魔王を討ちとらんとする者が現れたんです」

「それで、僕に〔勇者〕を倒せって?」

「お願いできますでしょうか?」

つまり・・・これは夢ではない?

一は、試しに頬をつねってみた。・・・心のどこかで痛くなければいいのに。と、思っていたが・・・

「痛い・・・」

夢ではなかった。

「嘘だろう・・・？まさか、現実？そんな、まさか・・・」

ひやりと一の背筋が冷たくなった。不登校児である少年が｛勇者｝を倒すＲＰＧなんて、見たこともないし、聞いたこともない。ましてや、これが現実だとしたら、色んな意味ですごすぎる。現実であれば、ここに平然と立っているなんてとてもできやしないのに。

「でも、僕は・・・。つ、強くないですし。弱気だし・・・。もっと、他の人に頼んだほうが・・・」

「太陽はあなたを選びました。ならば、わたくしはあなたを信じます」

「・・・。」

外に出たかった。ずっとずっと・・・

これが、夢ならなんだか都合が良い気がした。全然人前でも平気でいられるし、なにより、外へ出られる。

「分かりました・・・僕なんかでよければ・・・」

「ありがとう！！」

ユナはそこではじめて笑った。つられて、一も笑う。

ただ、ルカウティウスの一を見つめる瞳は冷たいものだった・・・

# 太陽の世界（後書き）

勇者が悪者って、なんかスゲー・・・

# 同い年

目の前には、美味しそうな料理が並ぶ。

トマトのスープにサラダ、そしてチキン・・・

時計は昼の１２時をとうに過ぎ、朝から何も食べていなかった一の空腹感は最高潮だった。

全ての料理において、空腹は最高の調味料なんてゆうが、それはごもっともである。

「いただきます！！」

最初の一口。

料理は、鮭をガーリック風に味付けしたもので、口に入れるとにんにくの風味が口いっぱいに広がり、鮭のうまみを引き立てる。

「ん～・・・おいし」

広いテーブルの向こう側には、ユナが座ってじっと一を見つめていた。

「・・・あの、何か僕に用ですか・・・？」

「あ、その、たいしたことではなくて・・・いえ、えと・・・一様は、お幾つでいらっしゃいますか？」

「15・・・ですけど」

「あ！・・・あぁ～。わたくしと同じ年齢なのですね」

・・・同い年？

両者、動きが停止した。

すっかり、ユナが年上で一が年下だとばかり思っていたのである。

「あ・・・はは」

なんだか、恥ずかしくなった一は手を動かし、料理を食べることによって紛らわした。

（なんだろう・・・この違いは・・・）

誰がどうみても、ユナのほうが大人びているとこたえるであろう。

まぁ、一国の姫君と不登校児を比べる時点で可笑しいのだが。

「ご、ごちそうさまでした」

なんだかんだいって食べ終わってしまい、手を合わせた。

「お口に合いましたでしょうか」

「はい。とっても美味しかったです」

「そうですか、それはよかった」

これを不味いというほど、自分は舌が肥えているようにみえたのだろうか・・・？

世間知気味の一はなんとなくそう思った。

「今日はしっかり休んで、明日には出発するつもりですが、よろしいですか？」

「あ、はい」

「では、お部屋にご案内しますね」

にっこりと笑って、ユナは席から立ち上がった。

「はぁ～・・・」

案内された部屋に入り、早速ベッドに倒れこむ。

なんだか、とんでもないことになってしまった気がしていた。

〔太陽の世界〕〔月と太陽の狭間〕〔月の世界〕〔勇者〕・・・

ゲームではないし、夢でもない。

勢いで答えたものの、自分になんかできるのだろうか・・・

色々考えていると、だんだん不安になってきた一は、毛布に包まって丸くなった。

学校や、クラスメイトのことを考えてると怖くなってくるので、いつもこうやって眠りに着く。

『悲しかったら、眠るんだよ。お日様が照っているなかでね・・・？』

そう言っていた、祖母を思い出し一は眠りに着いた・・・。

## 同い年（後書き）

お腹一杯なのに、書いてたら何か食べたくなってきた・・・

## いざ、〈勇者〉を倒す旅へ

「うわ・・・」

Tシャツにジーンズといった服装だった一は、旅に出るに当たって服を着替えることにした。

というか、強制されたのだが。

服を着替え、いかにもRPGの主人公のようになり始めた自分に戸惑いつつ、一はほんの少し浮かれていた。

そして、剣を腰に差して部屋を出た。

「あぁ、一様!!」

城門付近で立っていたユナが一に気づき、駆け寄ってきた。

「あれ?ユナさんも来るんですか?」

今日のユナの服装は、昨日のドレスとは違い動きやすそうなものだったので、一はそう尋ねた。

「もちろんです」

一国の姫様が自分の旅についてくる・・・

なんというプレッシャーだろうか。一は内心、やめてくれぇー！！

と、頭を抱えていた。

もし、これでユナを死なせてしまったら・・・考えるだけで恐ろしすぎる。

「俺も行くぞ」

「ルカウティウスさん・・・」

「ルカウティウス・・・」

別に昨日と何も変わらないルカウティウスがやって来て、一の前に仁王立つ。

威厳に溢れた青年は、一を見下ろし低い声で言った。

「覚悟はあるのか」

「・・・は、はっきり言うと、いまいちこの状況についていけてなくて・・・」

「あるのか、ないのか」

二択で答えろということらしい。

一は、ほんの少し悩んでからはっきりと言った。

「ないです」

「・・・ないのに、行くのか」

「僕は・・・きっと何もできないだろうし、ぞれに力があるとは思えない・・・きっと、死ぬということも、よく分かっていないと思います・・・ルカウティウスさんと比べると。」

ルカウティウスは少しの沈黙ののち、

「行くぞ」

と、だけ言った。

良いということなのだろうか・・・？

一は、よく分からないまま、「はい。」と言って歩き出す。

こんなパーティー・・・・、いや、こんなメンバーでできるのだろうか。

「まず、向かうとすればフーカ村かしら」

地図を見ながら、３人は歩いてゆく。

「フーカ村・・・ここよりもう少し東ですね」

「ここから〝勇者〟が出るなんて珍しいのだけど・・・」

「〝勇者〟が出たかなんて、分かるんですか・・・？」

ルカウティウスとユナの会話に割って入るのも、なんだかと思ったが、どうしても気になったので勇気を出して聞いてみた。

「あぁ、そうね。それは言ってなかったですね。ルカウティウス、説明をしてあげて下さい」

「〝勇者〟は魔王討伐のため、各地にやってくる悪魔を・・・〝月の世界〟の者を攻撃する。そこで、俺たちに報告してくるというわけだ」

「なるほど・・・」

「その時は、悪魔達が〝勇者〟を攻撃しても罪にはならないということになっているのだけれど」

そう付け足して、説明は終了した。簡単に説明してくれたので、一はすぐに覚えることができたのである。

「まぁ、フーカ村はのどかな良い村ですから」

ユナはそう言って、一を安心させようと思ったのかも知れないが当の本人はほんの少し、旅行気分でいた。

## いざ、〔勇者〕を倒す旅へ（後書き）

やっと、冒険が始まりました。
あぁー・・・「ルカウティウス」が打つのめんどくさい！！

## フーカ村

ざぁ・・・

風で木の葉と葉がこすれあい、音を奏でる。

フーカ村・・・風車がいくつも並び、壮大な草原に習うように牧畜を主とする者達が住む村。

（田舎って感じだな）

村というくらいなのだから、それなりには心の準備をしていたが少し、ショックを受けた。

サイケデリカが華やかなだったので、心のどこかで綺麗な建物を想像していたのかもしれない。

「一様、どうかしましたか？」

「あ、いえ。なんか、ほのぼのしてるなぁー。と思って」

あはは・・・と、笑い誤魔化し、フーカ村へ足を踏み入れた。

「ンモォー・・・」

「メェー、メェー」

村に入ると、牛や羊達の鳴き声で溢れていた。

牛舎のような建物が建ち並び、買い物に来た奥方がそれぞれのお店をチェックする。

一体どうしたんだろうか・・・気になった一は足を止め、じっとその光景を眺めてみると、1人の奥方が店に近づいた。

「2リル、頂戴」

「はいはい、毎度!!」

店の者は、いそいそと牛に近寄り乳を搾った。

(そっか・・・頼まれてから乳を搾れば新鮮な牛乳が飲めるな・・・)

一は謎が解けたのに満足したのか足を動かした時

「一様の世界はこうして牛乳を得るのではないのですか?」

ユナがたずねてきた。

「うん。なんていうか・・・搾ってからだいぶ経ってるかな」

「そうですか。なら、宿でこの村の美味しい牛乳をいただきましょうか」

にっこり笑って、また歩き出すユナに一は見失わないように走って駆け寄った。

見失うほど、人なんていないのだが。

「あらまぁ、ユナ様」

ユナが訪れたのは宿というよりも、普通の民家だった。

「こんにちは。ラミアさん」

2人は、どうやら顔見知りらしく仲がよさげだった。

「あなたが来たってことは・・・あの子がかい？」

ラミアと言う30代くらいの女性の視線が一に移る。

「は、一です。初めまして！！」

これが現実だと分かった今は、新しい人に会うと少しどきどきしたが、不思議と恐怖感はなかった。

「うっふふふ。ずいぶんとお行儀のいい坊やだね。まぁ、中に入りなよ」

「お邪魔します・・・」

3人は、ラミアの家に入れさせてもらうと、その瞬間ぶわっ!!と、甘い香りが一の鼻孔を刺激した。

「あっははは!!ごめんね、驚いたかい?」

「び、びっくりしました・・・」

「うちの家はね、代々香水を作ってるんだよ。他の町に牛乳を売りに行く時とかね、臭いと近寄ってくれないから」

「売りに行くって・・・牛を連れて行くんですか?」

「そうだよ。新鮮が一番だからね!!」

ラミアはそう言って一たちに席を案内した。

席といっても、いつも食事を取るようなテーブルのところのイスだが。

「一?だったけ?ホットミルク飲む?」

「の、飲みたいです!!」

「よし、じゃあ作るからちょっと待ってな」

ラミアは台所に立ち、大きなビンに入れてある牛乳をなべに飲む分だけ注ぐ。

「あ!!ユナ様とルカもいるかい??」

「じゃあ、お願いします」

「頼む」

「おっけー」

2人分、追加して暖炉の上に置き温める。

「それで、〈勇者〉討伐はどうなってるんだい？」

「だいぶ減ってはいますが、熟練の〈勇者〉となると手に負えない状況です。魔王には到底かないませんが・・・」

「はぁ。困ったわねぇ・・・いくら人間といえど限界はあるとゆーのに」

ラミアはため息をついて、遠い目をした。

## フーカ村（後書き）

そろそろ寒くなってきましたね。
ホットミルクが恋しい季節がくるぅ！！

**ミルです。**

「はい。できたよ」

コップへ移したホットミルクを3人それぞれの前に置いた。

「いただきます」

湯気が立ち、コップを持つと少々熱かったのでフーフーと、息を吹いて少し冷ましてからやけどをしないように恐る恐る飲んでみた。

「おいしい・・・！」

牛乳独特の臭みがなく、味がしっかりしている。

「それはありがとう。」

ラミアは嬉しそうに微笑んで、窓の向こうを見つめた。

「遅いわね・・・まだ帰ってこないわ」

「どうかしたのか？」

「いや、たいしたことじゃないんだけど・・・ミルが帰ってこないのよ」

「あぁ、それじゃあ僕ちょっと見てきます」

「行ってくれるのかい？ありがとう」

一は、席を立ち家を出た。

ミルというのは、ラミアの娘さんのことだろう。一は、ラミアが見ていた窓のある方向に歩いていった。

「あ・・・」

草原かと思った家の裏は、花畑。

そこに少女が1人、花を摘んでいる。

茶色い髪を左右二つにくくり、もくもくと作業に取り掛かっているようだった。

一は、ゆっくりと少女に近寄った。

「あの・・・」

「きゃぁ!?」

少女は悲鳴をあげ、振り返った。茶色い髪に、茶色の瞳。

「あ、えっと、ミルさんですよね?」

「はい・・・」

「僕、一っていいます。あの、ラミアさんが遅いって、心配していたので呼びに来ました」

「一・・・君？あの、ありがとう。作業していると時間が経つのを忘れちゃって・・・。でね、あの。図々しいかもしれないけど、この花を入れたカゴを加工場まで持っていってくれないかな？」

「いいですよ」

「ありがとう。じゃあ、こっちは私が持つから、一君はそっちを持って」

「うん。」

カゴを持って、2人は加工場まで歩いた。

加工場は、家のすぐ近くだ。

「一君、〈勇者〉討伐に来たんでしょう？」

「そうだけど・・・なんで分かったの？」

「なんとなく・・・かな？」

ミルはラミアに似て明るい子で、その笑顔はまるで花のようだった。

「うん、これでおっけ。ありがとう、一君」

「ううん、たいしたことしてないし・・・」

「それでも、助かったから。ありがとう！」

「ど、どういたしまして・・・」

なんだか、目の前の子が眩しくて一は恥ずかしくなった。

（あぁ、日向の子だな）

自分とは反対の人・・・

「よし、じゃあ戻ろうか」

「おかえり、また作業に夢中になってたんだろう？」

「ごめんなさい」

ミルは、てへ。と笑い、イスに座った。

「改めて紹介しておくわね。うちの娘、ミルだよ」

「ミルです。」

「仲良くしてやってね」

ラミアは、我が娘の背中をばん！と叩いた。

「いたっ！！お母さん、強すぎ！！」

「ごめんごめん！！」

その場は、終始笑いが溢れた。

## ミルです。（後書き）

今回は、ミルちゃんが登場しただけ。。。
もう、ぐだぐだです。

## 当たり前の幸せ

すっかり辺りは暗く静まり返り、ほのかに肌寒い。
そのせいか、夜空に輝く星がとても綺麗に見えた。
一は草原に寝転がり、腕を枕にして空を見上げていた。こんな綺麗な星空を見るのは初めてだった。

「こんな所で寝そべっていては風邪を引きますよ」

「あ・・・ユナさん」

ユナは一の横で三角座りをして、空を見上げた。

「この世界は・・・どこもこんな風に星が綺麗に見えるんですか？」

「え？あぁ・・・そうですが、一様の世界は違うのですか？」

「あんまり星は見えないです・・・すっごい田舎にいけば、これぐらい見えるかもしれませんが」

「そうですか・・・。そういえば、久しぶりなんです。星空を・・・眺めるの」

「こんなに綺麗なのに？」

「だからでしょうね・・・とても綺麗。それが当たり前で・・・」

当たり前って、すごく幸せな事だ。

なんて、よく言われるが、本当にそう思ったのはこの時がはじめてだった。

フーカ村に来るまでだって、車とか自転車って便利だったな。と、何度も思った。

2人はそれからただ、星空を眺めていた・・・

「ラミアさんの息子さんが・・・」

「ごめんなさいね、あんなバカ息子で」

次の日、一はここに来た理由を聞くこととなった。それも・・・ラミアの息子が〝勇者〟になったというものだった。

「ある日突然ね、思い立ったように『母さん!!オレ、〝勇者〟になる!!』って言って、家飛び出して・・・それきり、帰ってこないのよ」

「それは、何日ぐらい前の話なんだ?」

「3ヶ月くらい前かしら・・・」

「分かりました。とりあえず、どんな服装だったのか。それと、名前を一応・・・」

「服装は、普通の普段着に赤いマントを羽織っているだけよ。名前は・・・マルク」

「・・・じゃあ、行きましょう。」

「あ、はい」

当然のように立ち上がった2人に、一は急いで立ち上がると、ラミアが「ねえ」と声をかけた。

「・・・気をつけるんだよ」

「?はい・・・」

ラミアの一を見つめる目があまりにも悲しそうで、一は少しうろたえてしまった。

(どうしたんだろう・・・)

一は、疑問に思いつつ2人に続いて家を出た。

「うわ・・・」

やってきたのは森の中にあった、いかにも悪魔や魔物の住処といった不気味な感じの洞窟だった。

「この中にマルクさんがいるんですか？」

「多分な・・・」

「？？」

やはり、そうだ。さっきから2人の様子がおかしいのだ。まるで、死者をともらうかのような・・・。

「何をしている、行くぞ」

「あ、すみません！！」

ぼお・・・っとしていた一をよそに歩き始めていた2人を追いかけるように一は暗闇の洞窟の中へ入っていった・・・

## 当たり前の幸せ（後書き）

なんだか、怪しくなってきた・・・

# 魔族

「真っ暗ですね・・・」

洞窟の中は、壁に簡単なたいまつがついてある洞窟内は、どんよりとした暗闇で包まれ、長時間ここにいるとなれば、かなりの体力を消耗しそうだ。

「静かね・・・誰もいないのかしら・・・」

「それは違うでしょう」

ルカウティウスが足元を見やる。

「わああ!!」

そこにあったのは、白骨化した人の死体だった。

「・・・」

ユナは、しばしその死体を見てから「違う」と首を振った。これは、マルクではないと。

そんな落ち着いている2人をよそに一は、初めて見る死体に怯えていた。

「一様は・・・見るのは初めてですか」

「あ、・・・はい」

あえて「何を」かと聞かなかったユナの優しさに感謝し、一は弱々しくうなづくと、ユナも弱々しい微笑を浮かべた。

「わたくしも初めて見たときは、ショックで夜、眠れませんでした・・・」

どうか、マルクさんが生きているようにと願いながら、3人は進んでいった。

「ここが、洞窟の最深部・・・」

大きな場所に出るとそこの中央に誰かが立っていた。

「あれは・・・」

ルカウティウスが目を細めてその中心に立つ者を凝視した。

「おやおや・・・これはこれはユナ様ではありませんか」

尖った耳に妖しく煌めく青の瞳。人間ではない何かが違う男がうやうやしく頭を下げた。

「まぁ、ドゥーデント様。こんなところで会うとは奇遇ですね」

「いえ、ちょっとここの探索を命じられまして・・・」

「探索？この洞窟には何もありませんが」

「以前、ここにいた者の遺体を回収しに来たのですが・・・どうやら、骨の髄までやられてしまったようですね」

「申し訳ありません。わたくしの力不足で・・・」

「それはこちらもです。なかなか契約に踏み出すことができず・・・おや、そこの少年は・・・」

突然、話が自分に吹き込んできたので一はたじろいだ。

「えと。一です。初めまして」

「初めまして。殿下・・・魔王様の召使いのドゥーデントです。以後、お見知りおきを」

「魔、王・・・？え！？」

魔王・・・といえば、角とかが生えていたりコウモリみたいな羽がついていて、もっとこう・・・人間離れした容姿を想像していた一は少なからず、ショックを受けた。その様子に気づいたドゥーデントは、やわらかく微笑んで説明した。

「魔族は人間に変身することができるのですが・・・強ければ強いほど、人間の姿をしたときに美しくなるんですよ」

つまりは、強ければ美しく弱ければ醜いということだ。

「おや、とんだ時間を食ってしまいました・・・殿下がお怒りになる前に失礼させていたきます」

刹那、ドゥーデントを囲むように風が吹き、気づいたころにはドゥーデントの姿はなく、風が吹いた後の余韻が残っていた。

「い・・・今のは、魔法・・・？」

「一様は、見るのは初めてですか？」

「はい・・・。あの、魔法って使えるんですか？」

「はい、わたくしたち人間は使えませんが魔族は使うことができます」

人間は使えないのか・・・ちょっと期待していたが、見事にはずれ一はしょんぼりとした。

ＲＰＧといえば、魔法。それで魔物を倒していくのが一般だが、人間には使えないらしい。

「あれは・・・？」

突然、そう言って歩き出したルカウティウスに続いて、なんだなんだと壁際に寄ってみる。

「これは・・・！！」

# 魔族（後書き）

強ければ強いほど美形になるなら、やっぱり魔王さんは・・・！

## 〜勇者〜

すでに白骨化が進んだ死体が力尽きたように壁際に座っていた。何故、３人がこの死体を驚いてみたのかといわれれば、それは、その死体が以前は綺麗な赤であったであろう、今は泥をかぶりところどころ穴の空いた赤いマントを羽織っていたからである。

３人は口に出さずともこの死体がマルクであったことが分かっていた。

ユナはその死体に近寄り静かに祈りを捧げ、そっとマントを取り、じっとそのマントをしばし見つめ・・・うつむいた。

「ユナさん・・・」

すでに手遅れだったのが悔しくて泣いているのか。それとも、何故〜勇者〜になったのかと、母や妹を心配させてまで、これがしたかったことなのかとマルクに説いているのかは分からない。それでも、一はあったこともないマルクになぜか同情をしてしまった。

（マルクさんは・・・これでよかったのかな・・・〜勇者〜なんかにならなければ、家族とずっと幸せに暮らせていたかも知れないのに・・・）

「・・・帰りましょう。ラミアさんのところへ」

「・・・はい」「あぁ・・・」

３人は無言で来た道を戻っていった。広い場所を出る時、一は一度

だけ振り返った。でも、そこには誰もいない。ただ、薄ら光るろうそくの火に、無数に転がる骸だった。

それを最後に、一は振り返ることはなかった。

「ユナ様!?」

ノックをすると、勢いよく扉が開き中からラミアが飛び出てきた。

「あの・・・」

ユナは、そ・・・と、赤い布を差し出した。ラミアは、一瞬何かわからなかった様子だったが、すぐにそれが何なのか、何を指しているのかを悟ったらしく、小刻みに震える手で、それを受け取った。

「バカ・・・息子・・・」

ぎゅっと汚れきったボロボロの布を握り締め、その場にしゃがみこみ声を殺して泣きはじめた。

「・・・」

ユナはひどく悲しげな顔をして、ラミアを見下げていた。一国の姫として、民が亡くなるのはやはり悲しいことなのだろうか。一は、

ただ、マルクの死ぬ寸前の気持ちが気になっていた。

「ごめんなさいね・・・突然泣いちゃったりしちゃって」

席に座り、ラミアは落ち着いてぽつり、ぽつりと話し始めた。

「夫も・・・《勇者》になって亡くしててね・・・。もう、こんな思いしたくなかったのに・・・」

「そんな・・・」

夫の次に息子を同じ理由で亡くすなんて、どれだけの苦痛だろうか。もう、こんな思いしたくないと思い、そして、また出来事は繰り替えす・・・。

「一は・・・《太陽と月の狭間》から来たんだってね・・・そこでは、《勇者》は世間からどう見られているの？」

一は、一瞬戸惑った。ありのままを伝えても良いのか。そう思ったのだ。

「・・・英雄と似たような、感じです。」

「・・・そう。」

ため息交じりのラミアの返事は、何故か、一の胸にぐさりと棘が刺さった。

ー〔勇者〕って、なんなんだ・・・

辺りもすっかりと暗くなり、近くの林からはフクロウらしき動物の鳴き声がした、そんな頃。ラミアの家の近くに生える一本の木の枝に1人の男が座っていた。

男は眉目秀麗で鼻も整っており、非常にすっきりした綺麗な顔立ちをしていた。

（あれが・・・ユナ）

窓から見える一人の少女。じっとしているだけで品が漂うのだから他の少女達の中にまぎれていても、すぐに見つけれそうだ。

（それにしても・・・似ているな。いや、同然か）

男は、頭の中で彼女を思い浮かべた。元気がよく、はきはきしているのに凛として気品が漂い、月下美人の花のような・・・

「さーて。お仕事といきますか。」

愛し、ずっと見守ってきた彼女のため、男は立ち上がった。

## 〔勇者〕（後書き）

皆さんは、月下美人という花をご存知ですか？綺麗ですよ、月下美人。

初めて聞いた人は、「それ誰？」って、なったかもしれませんが、人の名前ではなく、花の名前です。ぜひ、見てみてください♪

## 新たなる町へ

この世界の象徴である太陽が昇り始めた頃、ふと、一は目が覚めた。

身体を起こし窓の向こうの景色を見ると、ちょうど太陽が昇ってきていて空がほのかにピンク色だった。

一は身なりを整えてから外に出て深呼吸をし、空に昇る太陽をぼう・・・と眺めた。

昨日がなんだか夢のようで。いっそ、あれが夢だったら良いのにと思った。それが、なぜかは一自身にも分からなかった。ただ、そう思ったのだ。

「もう行くんだね」

朝ごはんを食べてから、3人はフーカ村を出ることにした。

「色々と、お世話になりました」

タダで寝泊りさせてもらい、これからの旅路のためにいくつか食料も持たせてくれ、ラミアには、すっかりお世話になっていた。

「ユナ様、行くの？」

ラミアの後ろからひっそりとミルが顔を覗かせた。昨日、マルクの死を告げてからずっと部屋に引きこもっていたのだが、ユナたちが出ると知り、起きてきたのであろう。

大体の想像はできていたが、やはり、ミルの腫れた両目を見ると、ユナはどうしても申し訳ない気持ちになってしまった。もう、どうしようもないというのに。

「・・・ええ」

「お元気で・・・」

「ミルさんも・・」

こうして、３人はフーカ村を後にしたのであった。

フーカ村がだんだんと遠くなっていくが、前方はいまだ草原が続き、道らしい道がなかった。

それどころか、人っ子一人もいない状態だった。普通、何人か通りかかっても良いような気もしないのだが。

「あの、ルカウティウスさん。今度は、どこに行くんですか？」

「この方角を進んでいくと、それなりの町がある。そこを目指す」

「町の名前は、フルール」

フルール・・・と、1人口に出して繰り返した。今度はそれなりの町ではあるらしい。

「ただし・・・その町に行くには」

ユナの説明がピタリと止まり、その後に無数の足音がした。

「・・・この道、盗賊なんて出てましたか・・・」

3人は盗賊たちに囲まれていた。男たちは、いかにも悪そうな顔をして手にはナイフを持っている。

「お姫様、金品はここに置いてってもらいましょうかい」

「金品?そんなもの、あなた達には似合わないでしょう」

「寄こすきはないってかい・・・それじゃあ、強制的にもらおうか!!」

1人の男の声で仲間達が一斉にナイフを振りかざし、3人に向かって走ってきた。

「ひぃ!!」

一は尻餅をつき、そろそろと後ずさった。剣の心得がなく、初めて

こんな場面に遭遇した一は恐怖に耐えられなかったのだ。だが、そんな一をおいて少女であるユナは、剣を手に持っていた。

「はあああぁぁ！！」

一閃。ユナが剣を大きく振りかぶり、男を斬った。

「ぐふ・・・！！」

男は、崩れるようにその場に倒れた。斬られた部分から流れるまだ、温かい血。

「う・・・あ・・・」

初めて見る命のやり取りの場面に一はすっかり怯えきって、体中が震えていた。

次々と盗賊たちが倒れていき、そのたびに血が流れる。そして、その中には2人の血もあった。綺麗だったユナの頬に一筋の赤い線。ルカウティウスの二の腕の部分から流れる血。

それでも、盗賊の数は減らない。むしろ、押され始めているようにも見えた。

（助けなきゃ・・・！）

それでも、体中が振るえ立つことさえままならなかった。

「くそ・・・！！！」

一の心の中で焦りが生まれ始めた。このままじゃ、殺されると・・・

「助けてあげようか」

耳元で囁く低い声。

一が驚いて振り返ると、そこには見たこともない美男子がいた。

「誰なんで」

一が言い終わる前に、男は戦いの中へ身を投じた・・・

## 新たなる町へ（後書き）

ファンタジーには（ラノベ全般そうですが）美形がかかせませませんよね！！

「くそ・・・！！」

ルカウティウスは、苦戦を強いられていた。自分の仕事は、ユナの護衛だが一の今の状態から戦えるとは思わない。ルカウティウスは、2人をかばいながら戦わなければならなかったのだ。そうなると、いくらルカウティウスほどの強者でもこの数の盗賊を倒すには少々無理があった。

（こうなれば、一には・・・）

その刹那、ユナの身に刃が振りかざされる。

「ユナァーーーー！！！」

一の叫ぶ声でルカウティウスは、それに気づいたが今からでは間に合わない距離だった。

「ユナ様・・・！！」

刃が、太陽の光を反射して光る。

そしてー

ガキィィンン・・・

刃と刃がぶつかる音が響いた。

盗賊の持っていたナイフに、２つの剣

「あーらら。女に手を出すなんて・・・だからモテないんじゃないの？」

胸に心地よく響く低い声。

双剣を手に持ち、余裕の笑みを浮かべる。

「なんだとてめぇ！！」

「はいはい。そう怒らない怒らない」

「こ、こんにゃろ・・・なめやがって・・・！！」

盗賊は間合いを取り再度攻撃に出るが、相手の男はちっとも動かない。むしろ、微笑んでいる。

「どらあぁぁぁぁぁ」

ナイフを振り上げる。

皆が２人のやり取りに固唾を飲んだ。

ぐしゃ・・・

身体を貫く１本の剣。

勝ったのは、双剣使いの男だった。

「・・・で」

剣を抜き、空を切る。

「次は誰？」

何もなかったような爽やかな表情に、盗賊たちは後ずさった。理由は、それだけではない。倒された盗賊は、綺麗に1ミリのずれもなく、心臓を一刺しでやられていたのだ。

「に、にげろぉ！！」

盗賊たちは一斉にその場から逃げ出し、残ったのは3人と謎の男だけだった。

「あの・・・」

ユナは、恐る恐ると近づき声をかけた。

「何？」

「あ、の。助けていただいてありがとうございました」

「あー。別に良いよ。」

振り返って、そう答えると双剣を鞘に戻した。

男は眉目秀麗で鼻もすっきりしている。そんな爽やかな顔なのに、男の凛とした空気に一はほんの少し、憧れをおぼえた。

「貴様、何者だ」

男の首にルカウティウスは剣を当てる。

「ルカウティウス！！」

「答えろ」

制止するように言うユナを無視して、ルカウティウスは言葉を続けると、男はやれやれ。というようなしぐさをして、ルカウティウスの方に向き直った。

「初めまして。俺の名はクラウド。よろしく」

# 双剣使いの美男（後書き）

あはー。クラウド登場です。っていうか、剣、なに使うかすっごく迷ったんですけど！！

# 一触即発

「クラウドさん・・・」

一は恐怖から回復し、よろよろと立ち上がってクラウドを含む3人の元へ近寄った。

「あー！少年！！大丈夫か？！」

冗談交じりに言ってくれたつもりだっただろうが、一の胸にぐさりと棘が刺さった。〝太陽の世界〟に来て心が浮きだっていたせいもあるだろうが、今さら、自分が無力だったことに気づいた。

（僕は・・・何もできてない・・・）

そんな一に気づいているのか、あるいはわざと気づかないフリをしているのか。クラウドは、ルカウティウスに話しかけた。

「俺が名乗ったんだから、そっちも名乗ったらどうなんだ？」

「それは、すまなかったな。俺の名は、ルカウティウスだ」

「ユナです」

「ユナって、あれ？姫さん？」

気づくの遅いだろう・・・。ルカウティウスは内心ツッコミながら、ため息をついた。だが、この男・・・不思議な事に、何を考えているのかさっぱり分からなかった。ルカウティウスは警戒を強める。

「ところでお前はこんな所で何をしていたんだ?」

クラウドは、「あー・・・」と呟きながら、頭をかいて

「武者修行」

と、答えた。

「・・・」

さすがのユナもこれには呆気にとられた。つい先ほどまで落ち込んでいた一をも「は?」と言いたげな顔をしている。

「あははは!!!なんで、そんなポカーンって、してんのさ!!」

「貴様、ふざけるな」

「ふざけてないって!!」

クラウドは、ヘラヘラと笑っているがルカウティウスの顔は更に険しくなっていく。このままじゃヤバイ!と、察した一は

「あの、クラウドさんは武者修行をしているんですよね」

「さっき言ったじゃん」

「どうして武者修行なんてしてるんですか」

「それはね、強くなるためでしょ」

「もう十分強いじゃないですか」

「これからは、ちょっと言えないいんだけどなー。」

「〝勇者〟になるためか」

ルカウティウスの顔が、鬼のようになっている。

一触即発の状態にありながら、クラウドの顔から余裕が消えることはない。それどころか、

「そうだって言ったらどうする？」

「！！！」

ルカウティウスは、目を細め剣を構える。

「この場で貴様を殺す」

## 一触即発（後書き）

今回は、ちょっと短め。
クラウドの名前については、のちに活動報告にて説明したいと思います。
（意味があるんですよ）
ではでは。

## 新しい仲間、新しい町、新たな決意

一は、拳を強く握り2人のやり取りの行く末を見守った。もちろん、ユナもだ。

そんな空気の中、クラウドはプッと、吹き出した。

「あははは！！おもしろいね、あんた」

「・・・」

「そう、怖い顔しないでさ。な。あんた達、旅してんだろう？良かったら、俺も連れっててくれないかな」

「はあ！？」「え！？」

ユナとルカウティウスの声がかぶる。あまりに突然のことだったので、3人は驚いて目を見張っているのに対し、本人は「何みんなして驚いてんの？」というような顔をしている。

「そんなのできるわけが「分かりました」」

ルカウティウスの声をさえぎり、ユナが1歩クラウドに近づく。ルカウティウスにいたっては、もう何がなんだか分からなくなってきていた。

「ちょうど、お仲間が欲しかったところです。わたくしたちの旅に同行してくださるなら、大歓迎です」

「おし。じゃあ、決まりだな」

「よろしくお願いします・・・？」

「あぁ。よろしくな、少年」

流されるままに、とりあえず一は挨拶を交わした。目の端でルカウティウスを見てみるが、あまりの不機嫌そうな顔に（見なかったことにしよう）と、一は自分に言い聞かせた。

こうして、3人のほかに胡散臭い謎の美男、クラウドが旅に同行することになった。

辺りがすっかり暗くなった頃、一向は目当ての町フルールに着いた。

フルールは、レトロチックな町並みのどこか懐かしさを感じる町だった。道を歩いていればわいわいと、酒場からにぎやかな声が聞こえてくる。町には街灯があり、ろうそくの火がぼんやりと辺りを照らしていた。

「とりあえず、今日は宿で休むか」

ルカウティウスは、近くにあった宿に視線を向けた。

「そうですね。この時間帯にどこかの民家に入るのも失礼ですし。」

「とりあえず、早く入ろうぜ」

「貴様、いらぬことをすれば即、殺すからな」

「はいはい・・・」

一は、あはは・・・と、笑ってその場を過し、一向は宿に入った。

「あの・・・」

ユナとクラウドが眠ったあと、一は外にいたルカウティウスの元を訪ねていた。

「なんだ」

「あの・・・」

先ほどの不機嫌さは見られなかったので、一は内心ほっとしつつ、

「僕に、剣を・・・教えてくれませんか」

と言った。

ルカウティウスは、目をまんまるにして一を凝視していた。（やっぱり図々しいかな）と、どきどきしていた一に返ってきた言葉は、意外なものだった。

「何故だ」

「え？」

「何故、剣を学びたいと言った」

「それは・・・」

一は、ほんの少しうつむいて昼間のことを思い出した。

少女は戦っているのに、自分は怖くて立つことさえままならなかった無力な自分を。

「・・・強く、なりたいから」

「何故、なりたい？」

「ユナさんは、戦っていました。ルカウティウスさんも。なのに・・・僕は何もできなくて。だから！！」

拳を強く握り、顔を上げまっすぐにルカウティウスを見た。

「自分を変えたいんです！！」

ひときわ大きな声が、辺りにこだまする。

「・・・ふ」

ルカウティウスの口元に笑みが零れた。

「ならばその決意、証明してみせろ」

## 新しい仲間、新しい町、新たな決意（後書き）

いよいよ、かな。

# 特訓

「よろしくお願いします！！」

勢いよく頭を下げて、特訓は始まった。

「まずは基礎からだ。一、〝太陽の世界〟での剣術の心得は知っているか？」

「いいえ・・・？」

「〝太陽の世界〟では、剣は人を守るために使うものであって、私利私欲の為に使うことは禁止されている」

「それって、どこの世界でもおんなじじゃないんですか？」

そんなことを言い出せば、包丁は料理の時にバッドは野球の時に使うものであり、殺人やケンカに使うものではない。

そう思った一に、ルカウティウスは首を振る。

「つまり・・・戦争や試合での真剣、剣は使えないのだ」

「え！？」

「戦争は、銃か大砲になり刃物は一切の禁止だ。」

「じゃあ、使う時がないんじゃないですか？」

「賊から、家族を大切なものを守る時。・・・」

そのあとは何か言いたげな顔をしただけで、口を閉ざした。だが、一には分かっていた。今・・・自分の旅の目的である、{勇者}を倒し{月の世界}との平和条約を結ぶためだ。

これは、守るものに値する。なぜならば、もし、このまま{勇者}が魔王を倒そうとする動きが続けば、{太陽の世界}は、問答無用で攻撃を仕掛けてくるかもしれない。これは・・・そんな状況から大切な人を守るためであった。

一の様子に、何が言いたかったのかを悟ってくれたのに気づいたルカウティウスはほんの少し、ほんのちょっとだけ、口元を綻ばせた。

「まず、それを前提とし、お前はこっちを使え」

差し出したのは、木で作った何の変哲もない棒だった。

一は、それを受け取ってほんの少しよろめいた。

「思ったよりも、重いだろう?」

「お、重いです・・・」

「その重さで自由自在に扱うことができれば、真剣では、それより早く鋭く、扱うことができるようになるだろう」

「なるほど・・・」

「早速素振りからだ」

「はい！！」

「もっと、軽やかにしろ！！」

「ほら、もう鈍ってきているぞ！！」

「やけくそに振るな！！頭で考えろ！！」

「バカ！！危ないだろうが！！しっかりと握っておけ！！」

・・・・・

「おはようございます・・・あら？一様、すごくお疲れの様子ですが、どうかされました？」

朝、一は起きると腕が筋肉痛であった。「いててっ・・・」などと、言いながら身支度を整えて部屋を出ると、ユナがそう言ってきた。

「あぁ・・・うん。ちょっとね」

まさか、素振りをし続けて筋肉痛になっただの。なんてことが言えるはずもなく、一は笑って誤魔化した。ユナは、何か言いたげだったが一はそうして、誤魔化しその場をさりげなく去ってトイレに隠れた。

## 特訓（後書き）

ファンタジーの主人公が筋肉痛って、なかなかレアですね（笑）

## 2つの顔を持つ町

「お、少年!!えー・・・と」

「一です」

「そうそう!!一!!朝から、暗い顔してんなぁ」

「クラウドさんは元気ですね。」

朝っぱらから、元気がよすぎるというのも、なんだとは思うが一は口には出さなかった。

一はトイレを出てから、今度はクラウドに出会ってこのザマだ。

「な。一ってさぁ、{月と太陽の狭間}から来たんだろ?」

「そうですけど・・・」

「どうやってきたの?」

「どうやってって・・・」

夢を見て、ユナの頼みを引き受けることにして、そして・・・目を覚ませばここだったのだ。どうやってときかれても、答えようがなかった。

「まずさ、俺らって魔法使えないし」

そういえば、何故自分はこの〔太陽の世界〕にこれたのだろうか。

「それに、なんで一だったの？」

（そういえば、何でだろう・・・？）

そう言われれば、不思議な話だ。だが、そこでユナがこんなことを言っていたことを思い出す。

ー太陽はあなたを選びました

「太陽が・・・僕を選んだって」

「はぁ？なんじゃそりゃあ。」

クラウドは眉根を寄せるが、相変わらずの美顔はそのままだ。

「太陽ていうかさ、誰かが意図的に選んだんじゃないの？たとえばさ・・・魔王、とか」

指を鳴らし、クラウドはのん気にそんなことを言ったが、一には何かを隠している風にしか見えなかった。

「・・・クラウドさん、何を知ってるんですか？」

内心怯えながらそう訊ねてみるが、それがクラウドにはバレバレだったのか、クラウドは一の頭をわしわしと乱暴に撫でながら笑って

「そうビビんなって」

そう声をかけた。

（クラウドさんって、いい人なんだけど・・・こう・・・なにか隠しているような感じがするんだけどな・・・・）

ともかく、何も起こらなかったことに今は安堵した。

昼間のフルールの町は、夜とはまた一味違う賑わいを見せていた。

たくさんの人々が町を行き交い、噴水の近くでは子供たちが水遊びをしていたり、広場には少女が花を売っていたりと、温かな家庭を思わせる町に変身していた。

「夜の雰囲気もいいですけど、僕はこっちも好きです」

「夜は大人な雰囲気で、昼間は明るい町・・・2つの顔を持つ町なんて、おもしろいですね」

そんな意見を述べる2人に対し、

「デートにはぴったりだな・・・」

などと言う美男がいた。

一は、聞かなかったことにして辺りの風景に心を躍らせた。

3人が向かったのは、役所であった。

ユナの話によると、普通町ではこういった役所に〝勇者〟についての情報が届くのだそうだ。そこで、役所へ赴き〝勇者〟の居場所を探すのだそうだ。

「ユナです。すみませんが、〝勇者〟の情報を下さいませんか？」

「おぉ、ユナ様。少々お待ち下さい」

役員の男性は、すぐに書類を探しに奥のほうへいくと、すぐに戻ってきた。

「これが、この役所にある全ての〝勇者〟の情報でございます」

「ありがとう」

ユナは、微笑んで書類を受け取ると近くのソファーに座り書類に目を通した。

書類の数は、三枚ほど。

「少ないわね・・・まぁ、仕方ないかしら」

ユナは、書類を丁寧に折りたたみポーチにしまい、立ち上がってルカウティウスの顔を見た。

「まずは、ナラヤの森に行きましょうか。」

ユナの顔には凛々しさが、どこか欠けているように見えた。

## 2つの顔を持つ町（後書き）

そういえば、何故ダンジョンに行っているかの説明がまだでしたね。
次回、します。

## 一の不登校の理由

「ナラヤの森？そこに何をしに・・・」

「そうですね。まだ、説明していませんでしたね。」

ユナは、再びソファーに座り顔を一に向けて説明を始めた。

「《月の世界》と、わたくしたちの世界をつなぐ《歪みの道》は、そういった森や洞窟など人があまり訪れない場所に現れる傾向があります。」

「傾向ってことは・・・あるときとないときがあるってことですか？」

「そうです。そして、あったときの場合・・・それは完全に《月の世界》から魔族がやってきた時です。そして・・・対立するんです」

《勇者》の目的は、魔族の手から《太陽の世界》を守ること。それには、《月の世界》の支配者である魔王を倒さなければならない・・・そのために、《歪みの道》を通り《月の世界》へ行く必要があるのだ。

「ですが、大半の場合《月の世界》についても道が分からず、魔族に手を出し、そのまま返り討ちにされてしまうのですが・・・」

そのまま、場はしんみりと静まり返ってしまった。

洞窟にいった時のことを思い出すと、マルクのことが脳裏によみが

えり一の心を痛ませる。

「まぁ、それを止めたくてやってんでしょ。こんなとこでしょげてもしかたないだろ？」

「・・・そうですね。いきましょうか」

ユナは、まだその顔に陰りを持ちつつ立ち上がった。

ナラヤの森は、どことなく日本の森とよく似ていた。うっそうと茂っているのではなく、マイナスイオンが感じられる木漏れ日が優しい森。

一向は道なき道を進んで石の割れ目から流れる小川のほとりで休憩をしていた。

そんな中一は、筋肉痛のために体力をより多く消費していた。ずっと、外に出れずただでさえ運動不足なのに、筋肉痛もかぶされば少し歩いただけでもへとへとであった。

「一様は・・・〝月と太陽の狭間〟では、どんな暮らしをしていたのですか？」

そんな一に気を使ったのか、ユナがそんな他愛無い話を持ちかけた。

「・・・ずっと、家の中にいました」

はっきり言って、話すのは辛かった。だが、いつかは話さなければならないだろうなとは、思っていたので、この機に話し始めた。

「僕の住んでいた世界は、学問を習うことを義務としていたんですが・・・その場所に、怖くていけなくて・・・」

「怖い・・・？」

「僕は・・・いじめられていたんです。」

毎日、学校に行くと下駄箱には靴はない。落書きをされ、ゴミ箱に捨てられている。教室に入れば、黒板消しを投げられる。校舎裏で殴られ、蹴られ・・・

ーいやだ!!僕は・・・僕は・・・!!

ーうるせえんだよ。この・・・

「人殺し？一様は、人を殺したのですか・・・？」

突然告げた一の過去に、いつもは明るいクラウドも顔を曇らせて話を聞いていた。

「あれは・・・事故だったんです・・・それでも・・・僕は・・・」

人を殺してしまったのかもしれません

## 一の不登校の理由（後書き）

詳しい理由については、次の話にて。

# 慰め

その事故が起こったのは・・・僕が八歳の頃ですー・・・

その日は雨が降っていて、外で遊ぶことができず男の子達は室内で遊んでいました。遊ぶとはいっても、チャンバラや鬼ごっこといったもので、最初は誰もがふざけていました。

「おい！！見てみろよ！！」

調子に乗った男の子が１人、窓のふちにたって、偉そうに仁王立ちをしていました。その教室という部屋は、４階にあり、誰もそんな危ないことをしようとはしていなかったので、男子達は歓声を上げ、拍手を送りました。

「おい！！一もやれよ！！」

更に調子に乗った男子達の１人が、弱気だった僕の背中をぐいぐいと押して、同じことをするように強制しました。

「む、無理だよう・・・」

「いいからやれよー！！」

「男だろー！？」

男子が、群がってそういい詰めてきました。

その時数人の男の子が勢い良く僕を押して・・・

「あっ・・・！」

それで、こけるだけなら良かったのに、あいにく僕はずいぶんと窓辺に立つ男の子の近くにいて・・・

ーどんっ

窓辺に立っていた男の子は、まっさかさまに落ちていきました。

そしてすぐに、教室にいる女の子たちの悲鳴が上がりました・・・。

「そんなことが・・・」

「あはは・・・まぁ、大人の人は事故であり、僕に強制した皆が悪いということで、僕だけが罪に問われることはありませんでしたけど・・・やっぱり、大きくなると僕が悪いという話になるんです」

同じクラスの誰かの保護者が、何故自分の子が人を殺した子と同じ部屋にいるのかと苦情をしてきたり、女の子達から近づいてはダメと、母親から念押しされて・・・。

一人ぼっちだった。

誰もいない。

弟からは兄のせいでと恨まれ、母親は表向きは優しい母親を装っているが夜な夜な、一の悪口を言っては、泣いていた。

「・・・すみません。暗い話になっちゃいましたね」

「別に？この世界には、人殺しなんて一杯いるから気にしないけど？」

「クラウドさん・・・？」

クラウドは、木にもたれてその目を伏せている。だが、たんたんと話し始めた。

「俺も、人を殺した。１４の時だ。そんでそこの姫さんも、堅苦しい護衛兵さんも殺してるよ。人くらい」

やがて・・・目を開けてまっすぐに一を見据えた。

「いいか、人を殺すっていうのはな。自分で、自分の意思でするもんだ。少年の場合『殺してしまった』だ。それとこれとは、思いの重さが違う。そこにある罪悪感もな。」

一の中の何かが溶けていく。

「お前はちゃんと『殺してしまった』ことに罪悪感を感じてるんだろう？」

「はい」

「んじゃあ、いいじゃねぇか。善人な証だ」

そう言ってまた、眠るように目を伏せた。

これには、ユナもルカウティウスも感心した。クラウドは、一を慰めたのだ。

それにはちゃんと一も気づいていた。

「ありがとうございます・・・クラウドさん」

## 慰め（後書き）

以上が一の過去でした。
まだまだ物語は続くのですが、念のためここで書いておきました。

## 衝突

「ぐぐぐ・・・！！」

再び歩きはじめた一行に、なんと《勇者》が現れたのだった。

「どうして姫様が《勇者》の邪魔をするんですか！！」

剣を掴んで叫ぶようにユナに語りかけた《勇者》は、息も絶え絶えだった。１人対３人・・・しかも、相手はユナにルカウティウス、クラウドと来たのだ。これでは、《勇者》は歯が立たなかった。

「邪魔？それはあなた方のほうではありませんか？！」

「なんだと！？」

凛々しく、威厳に満ちた今のユナは、誰がどう見ても一国の国を統治するのにふさわしい雰囲気を辺りに漂わせていた。

「わたくしたちの世界《太陽の世界》は《月の世界》と平和条約を結ぶのを、あなた方がさまたげていらっしゃるではありませんか！！」

「嘘だ！！姫様は魔王に惑わされているのです！！目をお覚まし下さい！！」

「目を覚ますのはあなたです！！人間ごときガ魔王に勝てるとでもおもっていらっしゃるのですか！？」

「そんなの、やってみなくちゃわからないでしょう!?」

その言葉に、ふ・・・と、ユナから威厳と凛々しさが消える。

そして、ひどく悲しい瞳をして目を細める。

「・・・分かりました。なら、やってごらんなさい・・・わたくしを殺して、それを証明して見せなさい!!」

辺りに臭う血の香り。鼻が曲がりそうな強いにおいは、いつまでたってもなかなか消えることはなく、地面に横たわる〔勇者〕の死体もいつまでたっても発見されることはなかった・・・。

一行は、〔勇者〕を倒したあと、フルールに戻ってきていた。

時は、すでに夜ですぐさま宿をとり寝静まったのだが、ルカウティウスと一は剣術の修行にくれていた。

「ふん・・・!!ふん・・・!!」

汗で全身を濡らし、筋肉痛に耐えながら一は棒を振っていた。

ビュン！！と、風を切る音が規則正しいリズムを刻んでいた。それには、ルカウティウスもふむ。という顔をしていた。

「お前、いい線をしているな。やはり、俺の思ったとおり才能があるみたいだな」

「本当ですか！？」

「手を止めるな！！」

「あ、はい！！」

ルカウティウスに褒められ、思わず手を止めてしまうとそこは抜かりなく、注意され、振りながら話を聞いた。

「昨日一度やっただけで、今日はこの調子だ。お前は、なかなかいい線をいっているが・・・。」

「やはり、まだまだ練習不足が目立つな。ーほら、もう疲れてきたな」

先ほどまでしっかりと風を切る音がしていたのに、それは鈍り、リズムも乱れてきていた。

「す、すみません」

「いや、いい。今日はここまでにしよう」

「はい。ありがとうございました」

手の甲で額の汗をぬぐい、小さく頭を下げる。

こうしてみると、ルカウティウスは見かけによらず優しい人だなぁ。

と、つくづく思った。無造作な赤の長髪。

まるで、どこぞやの魔王のようなのに。

「なにをしている。中に入って風呂に入って来い、風邪を引くぞ」

「あ、はい！！」

棒を近くの茂みに隠し、一はふらふらな足取りで中に入った・・・

「よ。」

扉を開けると、真っ暗な塔の奥から少女が現れた。

一切の濁りのない透明度の高い水の色。その髪は月の光を反射してきらきらと輝いて見えた。

「お帰りなさい！！」

少女は、クラウドに抱きついた。

クラウドに比べ、1まわり2まわりも小さな身体はクラウドの腕にすっぽりと収まった。

「ただいま。ほら、時間がないんだから散歩に行くなら早く行くぞ」

「うん。ねぇ、今日は何の話を持ってきてくれたの？」

少女の手をとり、外に出る。

「今日は、今頃一生懸命棒を振っている少年・・・ティアが呼んだ少年の話」

「あぁ！！あの少年ね！！うまくできてる？」

「順調。あの調子ならきっと・・・《賢者》にたどり着くだろうな～」

「クラウド、気をつけてね・・・」

「へーき、へーき！！」

クラウドは笑ってみせたあと、《外の世界》の話をはじめた・・・

## 衝突（後書き）

謎の会話が最後のほうで出ましたが。。。
すこしづつ、謎を解いていくと思います。
けっこう、物語の進むスペースが遅いもので。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2799y/

僕等が紡ぐ恋の詩〜月と太陽のレクイエム〜

2011年11月22日01時15分発行